

PROGRAM NOTE

2017

近藤譲：嗟嘆（といき）

11人の声のための

Soupir

for 11 Voices

《嗟嘆(といき)》は、私にとって、Vox humana のための二つ目の作品になる。歌詞として用いたのは、日本近代詩の成立に極めて大きな影響を与えた上田敏の訳詩集『海潮音』（1905年出版）に収められているステファヌ・マラルメの「嗟嘆(といき)」である。

といき
嗟嘆

ステファヌ・マラルメ

(訳 上田敏)

静かなるわが妹^{いもと}、君見れば、想^{おもひ}すゞろぐ。

朽葉色^{くちばいろ}に晩秋^{おそあき}の夢深き君が額^{ひたひ}に、

天人^{てんにん}の瞳^{ひとみ}なす空色の君がまなこに、

憧^{あこが}るゝわが胸は、苔古りし花苑^{はなぞの}の奥、

淡白^{あはじろ}き吹上^{ふきあげ}の水のごと、空へ走りぬ。

その空は時雨^{しぐれづき}月、清らなる色に曇りて、

時節^{ときふし}のきはみなき鬱憂^{うつ}は池に映ろひ

落葉^{らくえふ}の薄黄^{うすぎ}なる憂悶^{わづらひ}を風の散らせば、

いざよひの池水^{いけみづ}に、いと冷^ひやき緩^{あや}は亂れて、

ながながし梔子^{くちなし}の光さす入日たゆたふ。

このマラルメのフランス語の原詩（'Soupir'）は、ドビュッシーが《ステファヌ・マラルメの3つの詩》（1913年）の第1曲に用いたことで、音楽家の間ではつとによく知られている。しかし、私のこの作品は、ドビュッシーの歌曲とは音楽的性格を大きく異にしている。それは、この詩に対するドビュッシーと私の解釈の違いを映し出している。尤も、そもそもこの詩がフランス語から訳されて日本語の詩となった段階で、そこには訳者上田敏の解釈が大きく働いており、その意味で、私の曲付けは、二重の解釈（解釈の解釈）である。優れた詩は（ちょうど、優れた音楽作品がそうであるように）、幾重もの解釈を経るにつれて、その輝きを失うことなく、却って、多様に異なった新たな光を放つ。そうした詩

PROGRAM NOTE

は、それを訳し、或いは、音楽化しようとする翻訳者や作曲家（つまり、「解釈者」）によって、尽きることのない魅力の源である。

2017年の6月に作曲されたこの作品は、11人の声のアンサンブル（それぞれ3人ずつのソプラノ、アルト、テノールと、2人のバス）のために書かれている。そして、そう意識して作曲したわけではないのだが、この音楽は、多分、ドビュッシーとヨハネス・オケヘムの音楽に対する私の敬意を何かしらの形で反映しているのではないかと思う。

近藤 譲

初演：2017年7月20日 ヴォクスマーナ第38回定期演奏会（東京文化会館小ホール）

初演者：西川竜太(指揮) ヴォクスマーナ

委嘱：ヴォクスマーナ

出版：University of York Music Press (UK)

録音：ALCD-115

演奏時間：5分